

人の理解を深める心理学研究

Psychology research to deepen human understanding

氏家 智仁
Tomohito Ujiie

小澤 勇羅
Yura Ozawa

仙石 洸
Hikaru Sengoku

野口 紅葉
Kureha Noguchi

丸尾 海月
Mitsuki Maruo

逢坂 駿也
Shunya Osaka

木村 天洞
Tendo Kimura

根本 祥吾
Shogo Nemoto

松田 雛乃
Hinano Matsuda

丸子 莉奈
Rina Maruko

概要 Overview

本プロジェクトでは心理学実験を通して、人間についての理解を深めることを目的としている。今回は本学内の問題点を心理学的観点から考察し、グループワークと音楽という2つのテーマに焦点を当てた。この2つのテーマを基に、以下の研究テーマを設定した。

This project aims to deepen the understanding of humans through psychological experiments. In this issue, we examined problems at our university from a psychological point of view, focusing on two themes, group work and music. Based on these two themes, we set the following research themes.



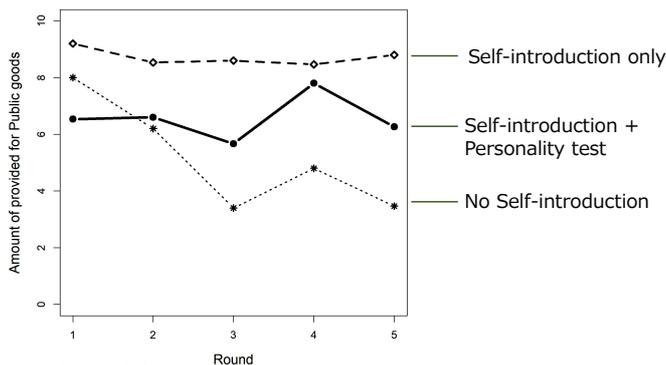
研究テーマ Research theme

相互理解と協力的行動に関する研究

Research on mutual understanding of personality and cooperative behavior

未来大はグループワークが多い。そこでAグループはグループワークを向上させたいと考えた。我々は、相手の理解を深めることで協力的行動が増えるのではないかと仮説を立てた。我々は協力的行動を計るために被験者に公共財ゲームを行ってもらった。

FUN has many group works. So, Group A wanted to improve group work. We thought that cooperative behavior would increase by the understanding each other. We had the subjects conduct public goods game in order to obtain cooperative behavior.

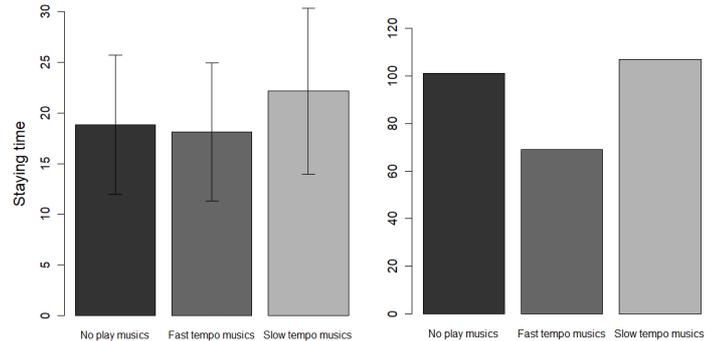


音楽と購買行動に関する研究

Research on Music and Purchasing behavior

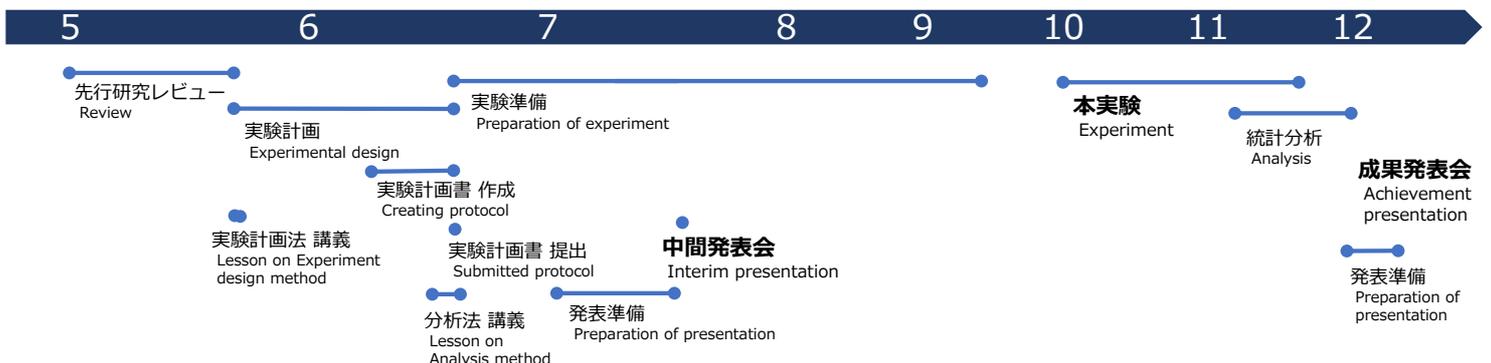
人間は音楽を聴くことで行動に変化が起きる。そこでグループBは、音楽を使って大学内の環境の改善ができるのではないかと考えた。我々は、売り場の混雑解消と売り上げの変化についての実験を未来大の購買で行った。指向性スピーカーを使い、おにぎり・お弁当類の棚の前を通りかかった人にも聞こえるように音楽を流した。

Humans change behavior by listening to music. So Group B thought that music could be used to improve the environment inside the university. We conducted an experiment about relieving congestion of a selling area and change in sales in FUN cooperative store. We used a directional speaker and played music that sounds only to those who passed in front of rice balls and lunch box shelves.



活動実績 Performance

実績 Performance



相互理解と協力行動に関する研究

氏家 智仁

小澤 勇羅

仙石 洸

野口 紅葉

丸尾 海月

概要

本グループは相互理解と協力行動の関係について心理学的に検討し、計画した実験をもとに実施する。今回の実験では、相互理解を深める体験をした後、公共財ゲームを行ってもらう。

背景

先行研究

「他者と同期行動を行うと、社会的結びつきが強化される」

Willemuth & Heath. (2009)

「相手と同程度の開示を行うと、相手に対して好印象を抱く」

小川 (2000)

仮説

- ・相互理解の程度により、協力行動の度合いが変化するのはではないか。
- ・会話の量や内容が、協力行動に影響を与えるのではないか。

実験内容

実験目標

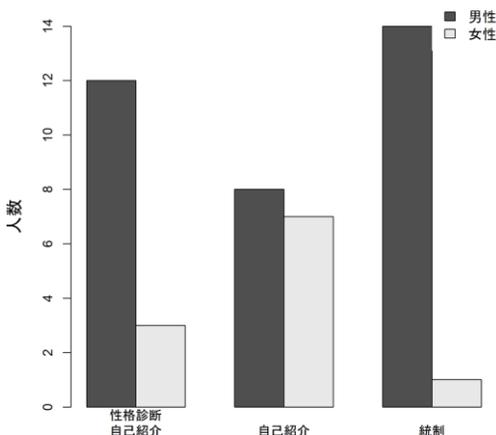
グループワークの成果を向上させる方策を調べる。

実験方法

1. 3人1組のグループを作る。
 2. 性格診断テストを受けてもらう。
 3. 相互理解の程度が異なる体験をしてもらう。
(詳しくは実験の条件を参照)
 4. 公共財ゲームを行ってもらう。
- ※ 実験時の会話は録音する。
また、実験時間は約90分とする。

被験者数

45名 (各条件5組ずつ)



各条件における男女比



性格診断テスト

本実験では、自己成長エゴグラムを用いた。自己成長エゴグラムとは、7つの性格特性タイプ中最も適合する性格特性タイプを診断する性格診断テストである。

実験の条件

- ・性格診断の結果を踏まえて自己紹介を行う条件 (性格診断→性格診断の結果を用いて自己紹介→公共財ゲーム)
- ・自己紹介のみを行う条件 (性格診断→自己紹介→公共財ゲーム)
- ・自己紹介を行わない(統制)条件 (性格診断→公共財ゲーム)

公共財ゲーム

グループ全体が得をするか、自分1人が得をするかを選択するゲーム

被験者への配慮

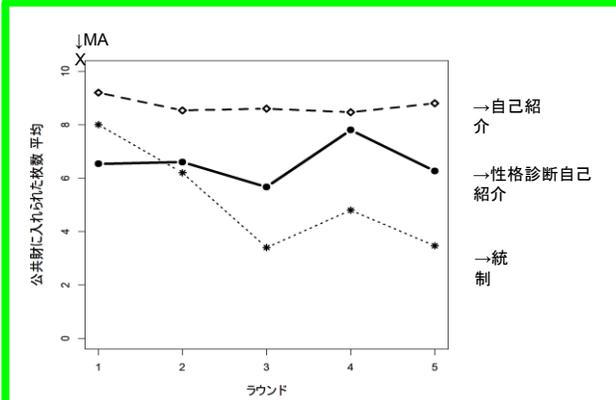
被験者募集の際に、観察の記録のため録音を行うことを記述する。実験中に使用した紙や声などのプライバシーにかかわるものを扱うので個人を特定できないようにデータを保存する。

分析方法

分散分析によって各要素間に交互作用があるのかを分析した。その後、Holmの検定によってどの要素に有意差があるのかを検定した。

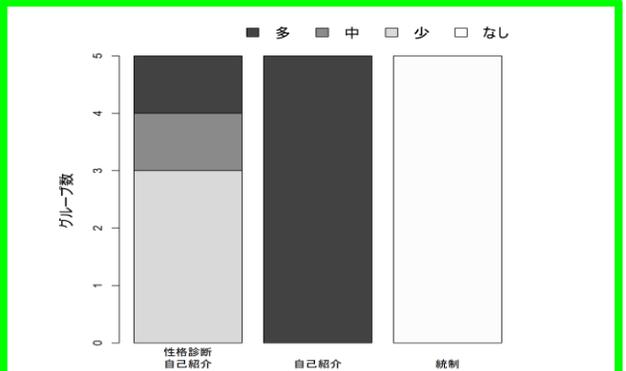
結果

ラウンドごとの公共財に入れられた資金の平均



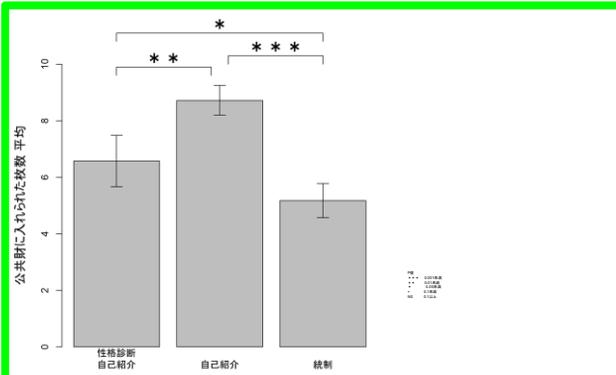
このグラフは、各条件におけるラウンドごとの公共財に入れられた資金の平均を表している。縦軸は、公共財に入れられた枚数の平均、横軸はラウンドを表している。このグラフから、自己紹介条件において公共財に入れられた枚数が多いということがわかる。

自己紹介における会話量



このグラフは、各条件の自己紹介における会話量を3段階で分類したものを表している。(統制グループは自己紹介なし) 自己紹介時間において沈黙時間を計り、その結果を参考に会話量を4つの尺度で主観的に分類した。

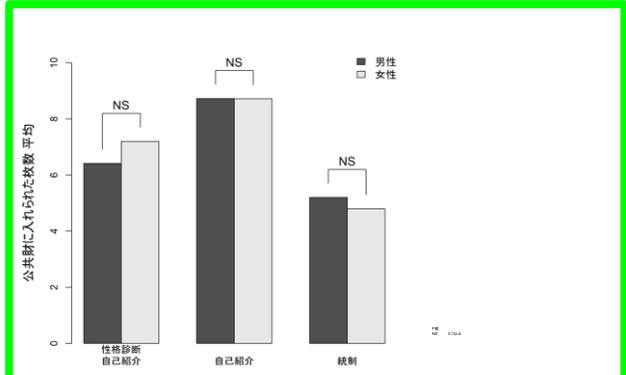
-条件間-



公共財に入れられた枚数に対する条件（性格診断自己紹介、自己紹介、統制）の効果を1要因の分散分析で検定した結果、条件の効果が有意であった。

性格診断自己紹介条件 > 自己紹介条件
自己紹介条件 > 統制条件
性格診断自己紹介条件 > 統制条件

-各条件と性別-



公共財に入れられた枚数に対する条件と性別の効果を2要因の分散分析で検定した結果、性別の効果が有意ではなかった。→「女性が多いから、自己紹介条件が高くなった」と言うことはできない。確認のためHolmの検定を行った結果、各条件間で有意な差が見られなかった。

考察と課題

考察

・相手と同程度の開示を行うと、相手に対して好印象を抱く。(小川 2000)
→自己紹介をした条件のほうが、自己紹介をしない統制条件よりもお互いに開示があったため、相手に対して好印象を抱いたといえる

・事実開示(住所、年齢、性格、家族など)があれば、人物像が作り上げられる。(岡本2006)
→制約が少ない自己紹介のみの条件は性格診断の内容を用いた自己紹介の条件よりも事実開示が多かったため、相手に対する親密度が上昇したといえる

課題

今回の実験では、自己紹介の時間が5分で統一していたが、自己紹介の時間としては適切ではなかったかもしれない。
→自己紹介の時間を操作して、協力行動をはかるといいかもしれない